

じることです。普段は、畑で大根や苺、トマト、きゅうり、サツマイモなど旬の野菜を育てて、料理して食べていますが、イナゴはその動物版といえます。

表1 博物館とさんぽくらの連携活動（2007年度）

実施日	テーマ	対象	子供	大人	合計
2007.6.08	ホタルの観察	会員/地元の方	32/2	28/1	63
8.21	昆虫採集と標本作り	小学生(てんぐ)親子	10	6	16
8.27	標本完成	小学生(てんぐ)親子	9	6	15
8.26	蜂蜜しぼり	スタッフ(研修)	9	8	17
9.26	イナゴの採集と試食	3歳児・2歳児親子	12	7	19
10.01	イナゴの採集と試食	3歳児(もぐら隊)	11	9	20
10.14	イナゴを食す会	鳴く虫研究会「きんひばり」に協賛		9	9

イナゴって、おいしい！

2・3歳児が、一生懸命とったイナゴをゆでると、海老のように赤くなります。それから、翅と後ろ足のぎざぎざした部分をちぎるのですが、子供たちは、怖がらずに平気で大人と一緒にこの作業をします。どうやらゆでて色が変わると、動く虫が別の物に変身した感じなのでしょう。そして、油で揚げて、蜂蜜と醤油で煮詰めていただきます。

最初は、恐る恐る食べてみる子供たち。どこからか「おいしい！」という声。そのうち何度もおかわりする子。周りの友だちの様子をうかがいながら口にする子。と様々でしたが、ほぼ全員試食しました。これらの体験を通して、「命をいただいて生きていること」について家族で話し合い、とてもよかったという感想も寄せられました。

また子供たちの、虫への認識が変わります。虫を怖がったりせず、平気で触ったり、つかんだりできるようになります。そして、イナゴの識別も容易になります。イナゴをみつけると、「すぐに料理して食べたい」としばらく親に言い続けた子もいました。また、虫が身近な存在になり、虫とりが楽しくなるようです。

昨年度は、イナゴを食べた後、子供たちは回りに飛んでいるモンシロチョウを網で追いか

《イナゴの佃煮の作り方》



てとるのに、スタッフと一緒にずっと熱中していました。
狩猟本能をくすぐられたのでしょうか。

連携活動の意義

このように、幼児期に「なまの命」にふれる自然体験は、子供たちに生きる喜びを体で感じさせてくれることでしょう。私たちスタッフも子供たちと一緒に大いに遊び、さんぼくらぶを楽しんでいます。その生きる喜び、感謝の気持ちをつみんなで共感できることが、生きる力や自信、信頼感につながっていきます。そして、小さな心に芽生えた、小さな疑問や興味、好奇心をさらに深め、解決していく道筋に、人と自然の博物館の先生方が、手を携えて待っていてくださるのですから、こんな幸せなことはありません。

3歳からさんぼくらぶで育った子供たちが、今小学生（てんぐ隊）になり、夏には、連携活動の「昆虫採集と本格的な標本作り（表1参照）」をしました。トンボの胸に昆虫針を刺して一週間乾燥させた後、標本箱に移す時に子供が、「何でトンボは、針の周りをくるくる回るの？」と聞きました。「トンボの体はやわらかいからだよ。」と先生が答えると、「何でやわらかいの？」と疑問が出てきました。「何でだと思う？」「それはね、・・・」と先生が答えてくれました。次々と不思議に思うことが出てきて、自然の奥深さ、すばらしさを感じつつあります。

また、初めての蜂蜜しぼりを体験したり、家族みんなでホタルの光にいざなわれました。子供たちの手の届くところにいるホタルやミツバチやイナゴを大切に作る気持ちが育つことを祈っています。

連携活動の意義

さんぼくらぶ

- ・幼児期の自然体験
- ・生の命にふれる
- ・感動・喜び
- ・センス・オブ・ワンダーの世界

連携 ⇄ 活動

《なぜ》疑問に答える
《どうして》興味を深める
調べる

人と自然の博物館

